
月 刊

MéLange

VOL.87



2013.11.24

詩と評論

月刊「MéLange」VOL.87

2013/11/24

月刊「MéLange」編集部

旧聞	安西佐有理	3
ダンス	中嶋康雄	4
遺影	にしもとめぐみ	5
霜月の雪	岩脇リーベル豊美	6
生きたい	川田あひる	7
ピタゴラスと 数秘術と ソラマメと	福田知子	8
連想ゲーム5	野口裕	9
百万木塔遷化頌	千田草介	10
ほころび	大橋愛由等	11
残照	上野都	12
夕映え	富哲世	13
真摯	月村香	14
自転	高木富子	14
なぜ、カフェにアムール虎が待っていたのか	中堂けいこ	17
プラスチック精神	高谷和幸	18
充滿する時間を歩み去るもの	寺岡良信	19
姿態	岩脇リーベル豊美	15
エッセイ	大橋愛由等	20
△詩人通りより△10 「マリア様とマリア地蔵」		
△神戸詞あしび△76 「多島海でつむいだ連詩のへことぶれ」		

編集部だより★08/「Mélange」の会とメンバーは重なるが、毎月一回播磨地域で開催している〈詩の教室・カフェエクリ〉(高谷和幸・千田草介両氏の運営)という勉強会がある。この会も読書会と合評会のセッションによって構成されている。「Mélange」と違う特徴として、播磨という地域の文芸サークルであること。つまり地域の風土と人とともに会を創っていかうとする気概が満ち溢れているのである。10月28日(月)には、このエクリの人たちと、瀬戸内国際美術祭を訪れ、その旅の間、参加者による連詩を作ったりして遊んだ。また高谷氏の個人詩「Oct.1号」にも執筆させてもらい、友誼を深めている。そして今月の「Mélange」読書会の発表者は高谷氏。テーマは、「なぜリテラリズム(ミニマルアート)は退屈なのか?」。(大橋記)

◆旧聞

安西佐有理

建設中の Nippon の抑鬱に
 謳われない英雄たちが 杭を打つ
 (電子レンジで調理すると完全破壊は、なにやらと同じ単語なのだ
 が)
 それに着手する 13年
 より多くの美術館が 自らの力を生成しはじめ
 「肉」は(そうだ、骨付きのあたしたち君たち!) 総合的な監視を
 探求する。
 孔子ではなく取り違えの中の梨、いや、ふたり(ああ、どちらも甘
 いのかしら)
 である知られざる元医師たちは危険を冒して
 見せたのだ、毒ガスの使用を (it's a show time)
 だが利益はどこにある?
 どれだけ速いと、速すぎるといえるのか?(死へのスピードとはお
 そらく無関係に)
 「No、戦いこそが(非戦、や、銭湯でなく)あたしの家
 シンプルで、わかりやす
 く、無意味にみえない」
 「そして君の」(さあ、声を大にして言おう)

無関心が、本当の敵だ

《点の集まり》
 (点の集まりが、灰色を生む)
 (点の集まりが、灰色の四角を生む、そこに敵がいる死角の刺客)
 《チェスの三六手》
 (王も兵も略号で呼ばれ、数字で動く)
 (投了、それは辞任である契約更新)。
 《掲げた手》は 一掃しようとする、稀有な有毒の遺産を
 現存最古最大級の、一号機を、所有する稀有なチャンスを。
 それは大掃除の合言葉。
 速くはやく、流れて、塵と共に
 新たな毒(なにやら)の流出に
 Nippon の崇敬の念が賃上げされる。
 どんな細部も小さすぎはしない 訂正記事では。
 かつての患者たちは挑戦する、さむさむとした精神の看護に
 Nippon の、危機にある無力に
 (そして) 感じた「ヴードゥのように科学的だと(少し小声なのだ、
 ここは)。
 「わあ、これ、ステキだよね」(ここはもつと小声なのだ)
 《政権闘争の敗北者にかげられた手錠》は。
 不安落着(めでたしめでたし)

*International Herald Tribune, International New York Times, The Japan Timesの見出し「漫画」チェス、空いた広告欄より

◆ダンス

中嶋 康雄

ぼくは赤いキノコちゃんダンスした
赤キノコちゃんはとっても魅力的な足をしていた
一本だけだけど
ぼくは犬の黒ウンコちゃんとダンスした
黒ウンコちゃんはとってもふくよかなボディをしていた
だいぶ臭いけど
ぼくはダンスをしたらその相手を食べる習性がある
交尾をした後の雌カマキリのように
ムラムラと相手を食べたくなるのだ
そして相手を食べると
相手のことがものすごくものすごく好きになり
相手の特徴を体に具えずにはいられない
赤キノコちゃんは毒持ちだったのだ
今ぼくは毒持ちだ
そして体は赤い
黒ウンコちゃんは寄生虫持ちだったので
今ぼくは寄生虫持ちだ

そして体はウンコ臭い
毒持ちで寄生虫持ちで赤くてそしてウンコ臭いぼくは
嫌われ者だ
おまけに
今

白い冷蔵庫ちゃんとダンスしている
重く冷たいステップを楽しんでる
ところでぼくは今冷蔵庫ちゃんを食べたくて食べたくて
ムラムラしている
冷蔵庫の中身は今までも食べていたけれど
冷蔵庫そのものを食べるのは初めてだ
たぶん歯は全部へし折れるだろう
結果的には丸呑みするしかないだろう
やだなあ
体重がおそろしく増えちゃう
でっかい獲物を丸呑みした蛇みたいにお腹が出張っちゃう
そして冷たい奴になっちゃう
体の色は
白と赤が混じってピンクになっちゃうかも
ピンク・・・
やだ
なんだか恥ずかしい

◆遺影

にしもとめぐみ

貨物を積んだり降り降ろしたり
道は困難だったろう

葬儀が終わり静かな食事の席で
義母とあなたの写真を眺めながら
ひとことふたこと話していると
どこからか小さな蝶が
遺影の前を軽やかに飛んで来た
会席の部屋で どこから迷い込んだのだろう
何度も遺影の前を舞い降りてはひるがえっていった

義母はおぼつかない頼りない足取りでやつと歩を進めて
骨揚げへ行くバスに乗る

「たったひとりの弟やさかい わたしもさみしなります」

杖を頼りに 歩くのもやつと 義母のしわを帯びた手
顔には 縦にも横にも細かくしわが刻まれる
義母の九十近い歩みに
三十四年の時を重ねた 私の手を添えた

火葬場では
すっきり焼けた白い骨はまばらで寂しい
蝶が 白く焼けた骨を横切つて舞い降りる
何回も繰り返しサヨナラをするように
義母の周りを飛んでゆく

◆霜月の雪

岩脇リーベル豊美

いまだ霜月 愛しい雪は
降誕祭の夢中に崩れる焼き菓子に
降っては融け
融けてはまたそこに振り積もる
この月の身重
濡も限界を滲ませている
帝王通りの産科医に駆け込むと
流血は落涙に似ていると
臥中安静を薄桃色の紙に記して
この児は救世主とおなじ星辰のもとに
生まれると予言した

翌月 喪失の記憶
暗い谷を見下ろす丘へと
石段を昇りつめ
シベリア横断鉄道の乗車券を
千切り捨てる
わたしの臍の緒が切断された
ブランデンブルグ門近くの露店で
五重のマトリヨシカを土産とする
不安かと思極める問いには答えず
伝道医師病院に月が満ち
半身をほぎ取られても
繁殖する希求細胞が
菩薩の声をあげる産道の痛みを
もう思い出せない

◆生きたい

川田あひる

犬も
おとなしい
一匹ずつ 大きな門へ
消えていく
喪失の 木陰でしょぼくしていたら
「あなたちよつと来ない」
声をかけてくれた
うしろをついていった
そのひとは速い
大きな門の裏には こんな
くねり道があつたのか
行きどまると
「ここよ」
指差された先に
みごとな銅板の表札があり
Yさんと知った

「あがつて」
あがりかまちにも 銅版画
いたるところに 銅
素晴らしいフォルム
「あなたもあるでしょ」
Yさんは問いかけていなくなった
わたしは取り囲まれた
銅版画を
一つ 一つ 見つめ
この世に
なぜ遺したか 考えつづけた
肉体は
腐乱する
すぐ焼いてくれるならいいが
かな
かな、かな、
ヒグラシ 哭く
生きたい
生きたい
ひよろり
細い
一本の
杖が
刺さっている

◆ピタゴラスと 数秘術 と ソラマメと

福田知子

その昔 ひとつとは数字には意味があると考えた その昔 ひとつとは数学を魂を浄化するための道具だと考えた

この思想が密教的なカバラと結びついて「カバラ数秘術」となる 「ピタゴラス教団」へとつながる ひとつは数字の持つ意味によって ピタゴラス魂を浄化する数学なるものによって ピタゴラス教団——当時（今もそうだが）結社の外に教えを伝えることは禁じられていた だからピタゴラス教団に関する資料はきわめて少なく 実態は明らかでない 古代ギリシャ・オルペウス教の影響をひきつぐ輪廻転生の考え方 それから原始共産制を敷き 財産を共有することを結社に入る第一の条件にしていた ピタゴラス教団には「数学の研究を重んじる派」〈宗教儀礼を重んじる派〉のふたつの宗派があった 後者の風習として ソラマメを食べないという禁忌があったのだ

ソラマメは古くから世界各地で栽培され 地中

海・西南アジアが原産地とされる ソラマメは紀元前2500年から食用にされていた イスラエルの新石器時代の遺跡からも出土した イタリアには「甘いそら豆」や「死者のそら豆」というお菓子があって 死者の日に食べる 細かく刻んだアーモンド・卵白・砂糖で作ったソラマメ形のお菓子——

古代ギリシャ人はソラマメを葬儀に用いた 古代ローマ人はソラマメを葬儀にも用いたが 食べることは厭わなかった 古代でソラマメが不吉として厭われたのは 花卉の黒点が死を連想させたからだ しかし ピタゴラス教団での禁忌は これとは異なる理由からであった ピタゴラスは〈ソラマメの中空の茎が 冥界ハーデースと地上とを結んでおり 豆には死者の魂が入っている〉……と考えたからだ

あるときアリストテレスは 「数が物体の質料だと彼らは考えた」と述べ またあるときには「数が物体の原型であると彼らは考えた」と述べた このため ピタゴラス学派には 数を実体だと考える人々と 数を物の原型としか考えない人々が混在していた ソラマメは数の実体であったか 数の原型であったか

ソラマメ—— 秋に種をまき 花は3月から4月 薄い紫の花弁に黒の斑紋のある直径3センチほどの白い花を咲かせる サヤには3から4個の種が含まれている このようにソラマメは3と4の数字でなりたつ

——隠された数秘術的意味

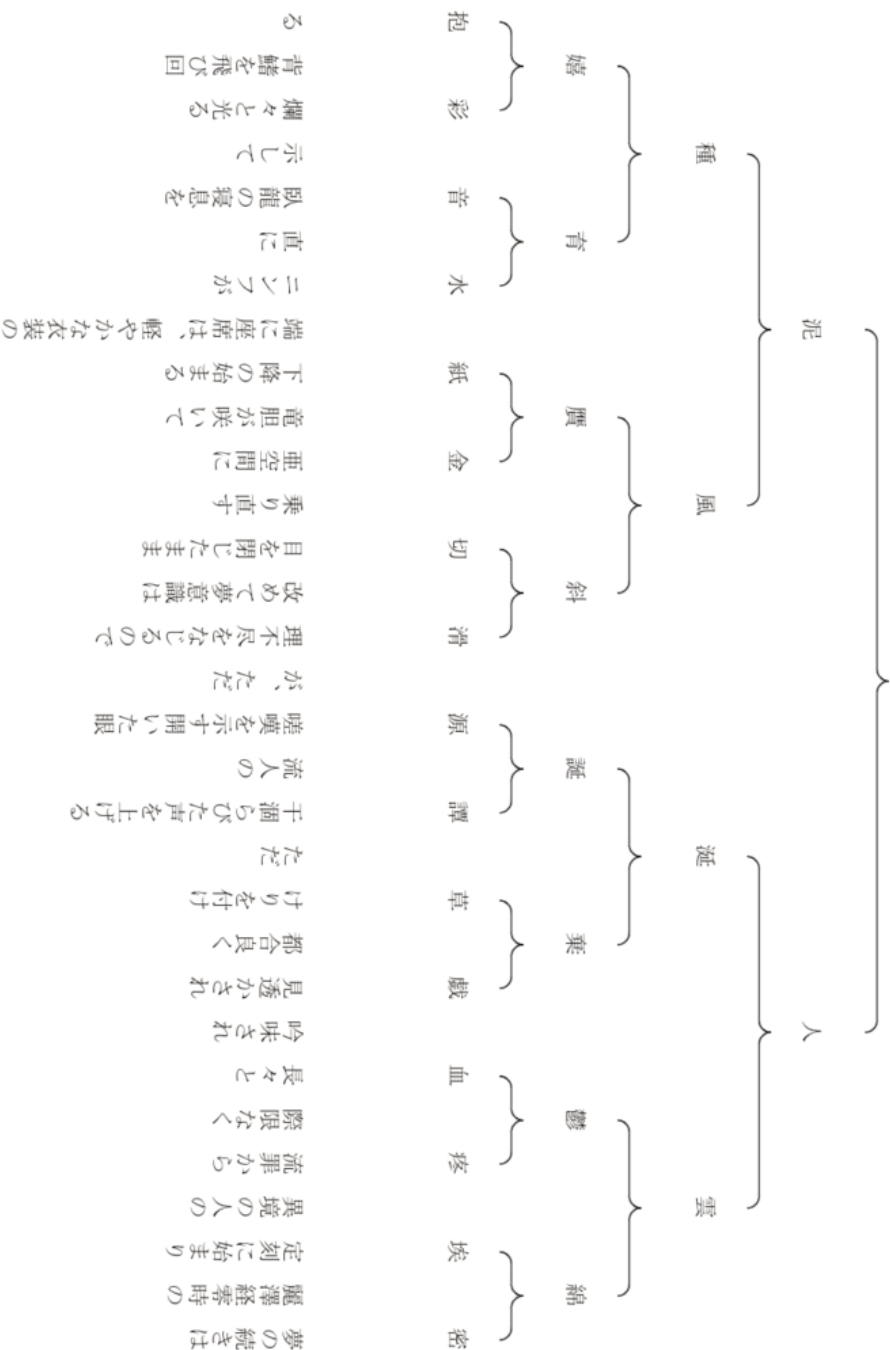
○「3」という数字は、発展と開拓の数。創造活動の展開、調和、安定、知性、超自然的な力、三位一体、三種の神器、三つの願いなど、安定の中に変化の可能性を内在す。惑星は木星。1+2は3となる。プラスとマイナスに加え、第三の動き——常に新しい刺激、現実活動、創造活動が加わり発展を暗示する。シンボルは三角形。裏の意味として破壊や混乱、セックスや男性性を暗示。身体的には、声・喉・肺と関係を持つ。

○「4」という数字は、公平とバランスの数。物質世界の誕生、ユーラシア・アフリカ・北アメリカ・南アメリカの四大大陸、東西南北の四つの方位、火・風・水・土の四元素、喜怒哀楽という四つの基本的感情等々、これら現実世界を創造する基礎となるもの。シンボルは四角・十字・卍など。4は大・自然、完全、安定、堅実、着実、慈悲、愛、善などを象徴すると同時に、頑固、無責任の意味もあり、惑星は水星と土星。身体的には、両手と両足を示す。

さて このソラマメ 和名の由来は さやが空に向かってつくから「空豆」 蚕を飼う初夏に食し さやの形が蚕に似ているから「蚕豆」という字があてられた……らしい

——ソラマメヲ 死者ニ捧グ 十六夜譚
——ソラマメヤ 天ニ向カイテ 数喰ラウ
——ソラマメニ 聲ヲ重ネテ 相似形

絵



◆連想ゲーム△5

野口 裕

(揺れている蛹見つけた屋下がり雨の在処は虹が知らせる)

◆百万木塔遷化頌

千田草介

いつごろからか平たかった町々が塔化して背をのばし櫛の齒状の長い影を落とすと塔に刺された空が太陽を絞って紅色の光りの汁を珪砂の被膜に滴らせませます。ほんとうは無機物の介在しない植物素材の都市であつたし塔も木造だつたはずなのですが石材やコンクリートのほか炭素繊維や樹脂などが入つてきて、しかも設計者や都市プランナーの意図を超えて、こうした被造物は造られるという受け身一辺倒を脱してみずからをかたちづくる疑似生命化を遂げたためにそこに住む生活者たちはまちづくりを考える必要から解放されまっただき自由を得て林立する建造物のジャングルと化した都市のなかを哲学しながら徘徊するのです。むかしの森林修行者たちがそうであつたように、人々は生まれながらにして林住期を死ぬまで生きます。哲学に興味のない者たちはホモ・ルーデンスとしてこの空間の中でただ遊びふけて生きていけるのです。こうして町々が住民の手をはなれて哲学的な意味で飛翔すると、立体化した辻々に巫女なのか娼婦なのか判然としない女が無数にあらわれて赤い玉のようなものを股をひろげて産み落とします。太陽が落とした汁で孕まされたのだと女たちが言うその玉が乳房のあいだで後生大事に温められるうちに中から尖つたものが突き出てきます。それは塔化した町の何万分の一かの雛型で、やはり縮小したコピーつまり子をつくるのがたとえそれが疑似的なものとはいえ生命化したものの業かたなのでしょう。油脂をたっぷりふくんだとおぼしき小さな木塔の多くは親の手をはなれ、おのおの勝手にノズル状の尻に点火して哲学者と遊興者たちをまとめて殺しに飛んでいきます

◆ほころび

大橋愛由等

封印していたつもりが一五年をかけて五色の組紐がゆるゆるほどけていたことは知らなかったことにしておこうと初冬の雲と合意するつもりでいたのだがいつの間にか表層に着床していた叙情が地被植物のごとく周囲に蔓延するまでにいたりその勢いは立冬に向かう光と影の延伸にも似て果たしてその広がりカタカナに置き換えることができるのだろうかとか地被され隠された場にはどのような哀惜が刻まれていたのかとかなどを思いなす日がやってきて

ソレは風を起こす装置だつたと気づいたばくは引き潮を見計らつて白虎の方向に向けひと振りふた振りした刻に頭によぎつたのはパリ・カルチエラタンでマオ・ツートンの肖像画が掲げられている書肆の近くにあつた文具屋に置かれていた風向計でありそういえば幼いころ風向計を買つてほしいとパパとママにダダをこねていたことをなつかしく思い出しながらセーヌ河に向かつて歩いていた光景であつてその時左岸で風向計を買つていたらこの〈起風機〉に反応していたに違いないと思う

たとえばもうひとつのめくばせが始まつたとしたら菊の花弁を数えたり日没する陽をおいすがつて吹く風の質料を測つたり曼陀羅華の果実が割れてはじきだされた種子の行末が気にしたりといった情動はともかくとしてずっと鷹の羽を〈起風機〉として使つていた南溟の巫者にどうやってソレを伝えようかと位相を変えてみたもののどうやらぼくは〈起風機〉によつて風を起こすつもりはないことに気づいたその日からアッサムティーを毎朝飲むことを習慣づけるようとしているのである

◆ 残照

上野 都

昇り 留まりやらぬ風
越し方に押され
行く末へ踏む朽ち葉
匂い立つ夜来の雨の
いろ艶めく楓のかけに
千日を走り抜ける既視
片崖の細い尾根道
肩を掴む手
眼差しを縫う朱が
小暗い道を辿る
水底へ落ちる錯誤ばかりに

合掌を焼く深い諦念
砕ける目
鎮もる奈落
火のかたちに
切り取られる闇は見えず

回峰の天は広く
戻りの道を唱える声も届かぬ
茜に誘われる灯
くだり道の
秋道の
苔むす丁石に
悔恨を打ち込んで

その日にも
身を映すべき
裾引く茜の大塊
つましくも
身を問う秋はひとつ
くだり道の
秋道の。

◆ 夕映え

富 哲世

昼の白い月の顔が
押しつぶされたメダルのように
海のなかぞらに浮かんでいる
岸の途切れた橋のような
そんなゆき場のない一日もまだあることを
いないあなたに伝えたい
目鼻もなく
手も口もなく
あなたはいま一切を一步の中へ
煙のように包んでいる
濡れた黄色い壁のよう

見上げると
万歳！
そこには足の立たない深みがあり
永遠の落下への
わずかな距離があり
視野の外れを
親しい影がことばのように

キッチンや

柱のかけに逃げ込むのがわかる
銀の糸をひいて降る星の雨と
惑星の焦げ臭い挿話を担って
壊れていくあなたが

逃げ出すじかんの沈黙を胸のあたりに呑み込んで
ついに見たかったのは
窓越しにふくらんでは
とりかえようもなく
あふれはじめ

日の出のような蟹色の夕映え
それはもう半分この世のものではないから
もう俯いて
暈は見ない
約束をたがえたわたしのために
ああ、ぶらんこのふねに

乗って行きたい
はじめと終わりをひとつにつなぐ
にんげんは
未来をなくして融け出していく
無感動な
牛のようだ

コンニチワ
なんでもないこの一日のため
わたしへの
最初でさいごのあいさつをしよう

◆真摯

月村香

たとえば真摯に願うことがありますということ
ことを真摯に言いますということ
をわたしはここから真摯に思っておりま
すということ
ことをわたしは何回繰り返せば真摯に受け止めて下さるのでしよう
わたしは祖母の墓に行きたいのです
ゆつくりお話をしたいのです
きつとぐじやぐじやに泣くでしょう
このあいに母の家つまり祖母の家に遊びに行つた時
食事をいただいてその時の食事というのが
茄の味噌煮と馬鈴薯の油揚げとい
んげんの煮物にニンニク醬油の牛肉であつたのを
なんて懐かしい田舎まんまに
来たみたいでうれし
いわという
と母は黙つてひどくうれし
そうでした

◆自転

高木富子

直径19センチ、長さ67メートルの鋼鉄線が
パンテオン・ドームの頂上から吊り下げられた
振り子 振れ 振れ 振れよ 振れよ
振れておくれ 地球の自転を証明したい
フーコーの振り子 世界を揺るがした
触れないで 狂れてしまうから
狂れないで おくれ 触れたとしても
愛しいよ 触れよう 触れよう
埋み火で焼く さて、戯れでなく
哀しみの先の無為・余分なことはしない、それが無為と
哀しみのシミ 紙のシミ 蓮の葉なども燃やすとか
その灰に風が騒いだ

すり抜け遠ざかり見失い途絶えたものたちよ
ゆるやかな麻痺 凧の日々 そのまま在り
地球は自ら軌道に在り回転し 人は自ら回り転ぶ

もはや十月のことで、彼方の出来事のように思える。隔年に、『科学の長い夜 Lange Nacht der Wissenschaften』と謳うオープンキャンパスに似た、むしろ入学希望者向けにというよりは、一般に開かれた催しが各地の大学で行われている。当日はエアランゲン―ニュルンベルグ間のバスのフリーパスや、シーメンスなど大手企業やフラウンホーファー協会といった研究機関の協賛もあつたようで、(自然科学系は特に)毎回、賑わいを見せているらしい。ご察知のとおり、人文科学系は、少なくとも日本学講座にはその協賛の形跡はなく、材料費や学生手伝いなどは自腹で行うのが常であるが、以前のプロイセン軍警察の建物の一郭だつたという、他の民家とそれほど見た目は違わないような、欧州外言語・文化研究所 Institut für Außenrumpäische Sprachen und Kulturen の建物は、参加者でいっぱい

詩人通りより／10 マリア様とマリア地蔵

岩脇リーベル豊美

なつた。日本学講座も中国学とともに携わり、先冬の段階で既にプランを練っていたものだったので、盛況となつたことは嬉しくもあつた。
長い夜のパンフレットには午後六時から翌午前一時までと書かれているが、会場造りをはじめ、千羽鶴、仮名文字そして漫画的描写を実践するキンダプログラムや午後の映画上映の催しも含めて、長時間にわたつた。夜の部は教師および学生イニシアティブによるミニ研究発表群であつたが、時間をかけて手作的、それでいて学問的なものになつたと思う。

その内容は、同僚のゼミのテーマに関連しての民俗信仰等について「幽玄ジャパン Das mystische Japan」と題して行つた。「日本神話」、「日本人は何故幽霊を怖がるのか」、「日本のポップカルチャーにおける幻獣的存在」といった題目が並び、なかでも、「犬と日本の起源」については、もともと日本にはペットとしての犬は存在せず持ち込まれたもので、それを大陸と日本の現在

の犬の頭蓋骨の骨格写真から証明したうえ、その後の寓話等での犬の受容と役割、また他国とのかわりを考察して、その方法が興味深いと思つた。

私はといえば、予てから気になつていた「マリア地蔵と習合」についてとりあげたく、歴史的、宗教学的概念の前提がなくジャバノロギーには素人のドイツ人聴者にドイツ語で―それは普段遂行していることでもあるが―数十分ほどにまとめて話すことは準備段階でも非常に労力を要したもの、進めるうちに、フィールドワークを再度したいと思うほど愉しく感じられた。

1932年夏、木曾中山道の奈良井宿の一体の子育て地蔵が藪の中に捨てられていたのが地元人によつて発見された。明治の廃仏毀釈の際に頭部と膝部分を破壊されたと思われ(隠れキリシタンを見つけて怒つた役人が切りつけたという説もあるが、信憑性は低い)、表情や情

緒は確定できないが、よく見てみると、抱かれた子ども(顔がやはり壊されている)の手にもつた蓮の花が十字の形をし、袈裟の下に聖衣を纏っているため、マリア地蔵と呼ばれ、江戸の禁教令下、隠れキリシタンが密かに祈るために作られたとして、現在は奈良井大宝寺境内に置かれている。私は学生時代に、何故だかもう経緯はわからないが、この像を観たことがある。中山道沿いの南信州は、このマリア地蔵以外にも大桑村天長院のマリア観音や、伊那清水庵の十字架が刻まれたお地蔵さん等から、多々当時隠れキリシタンがいた、もしくは木曾谷に隠れてキリスト教を信仰していた人々がいたと考えられている。

実際、当時当地は切支丹大名と知られる京極高知(1572-1622)によつて治められていて、領民もキリシタンになることは決して不思議ではなかつたのだが、それよりも不思議であることは、彼の地において、お父君がキリシタンであつたというようなことは時折耳にするこ

とがあるが、今現在キリスト者であることを称しているとは誰からもめつたに聞かないということである。

17世紀のはじめにはキリスト教は九州からほぼ北日本まで布教され、信者数は7万6千人を数えたという。江戸幕府が1612年禁教令を発令し、1640年寺請け制度などを設けて戸籍管理した理由は、1937-38年の島原の乱とされ、それによつて人民にキリスト者でないことを証明させるが、その間、迫害の表象に六道輪廻の地獄であつたりジャンヌ・ダルクの像が横切らなかつただろうか。仏教伝来の際の曾我氏と物部氏の闘争などが映らなかつたであろうか、と私には邪教的イデオロギーも浮かぶ。

日本人はそもそも信心があるのだろうか、という問いに移行するが、神道のような多神教は寛容な宗教であるから、他宗教も異国の神として受け入れ……云々という結論には達しなかつたし、日本人の宗教はそんな風に寛容ではない、というところ、叱られるかもしれないが、それがマリア地蔵の現在を鑑みての曲解でもある。マリア観音というのは、聖母マリアに類似の像に迷彩された祈りを捧げていたものである。マリア地蔵も迷彩色は強いが、子育て地蔵に限らず、身代わり地蔵やとげ抜き地蔵等、地蔵菩薩自体が観音菩薩よりも、死者に伴い、煩う者に伴い、また旅人に伴う、身近なボーディ・サットヴァであることを幾分解釈し、現世利益の点も決して否定的に捉えるものではないと考えられると思ふ。

長崎などのカタカナで書くカクレキリシタンは、二百年以上も正規の神父の不在なども原因として、また土着の民族信仰とも結びつき、独自のカクレキリシタン信仰を形成したという。オラジョなるラテン語による祈りは、やはり意味がよくわからないという意味で神秘的に聞こえ、もう原文は跡形もなく、呪文もしくはタントラのように響いたらしい。1873年に禁教令が解除された後も、カクレキリシタンはカトリック信仰に再入信することもなく、また南信濃では殆ど隠れキリシタンが忘却されるに至つてはいる。

◆なぜ、カフェにアムール虎が待っていたのか

有時秀記

左右に天球と地球のレリーフのある扉をすり抜けると、カウンターに向ってコーヒを注文する小さな影。カウンターの内側の主は沈黙し、代わりに主の隣に顔を出しているアムール虎の口から、うなりが発せられ、「めざめよ」の一声が影の耳に波動を送るのだ。席にすわる影は痛みと疲労のために夢遊する者のようで、カフェイン飲料をのみほすや、めざめた意識が全天の惑星軌道のすべてを把握しようとはばたく。そのはばたきのなか「アムール虎が比類ない難問の解を生み出すだろう」というおぼろな言葉の雲がただよう。だが眠り薬の混入したカフェイン入り抗酸化飲料は、アムール虎の残像をうかべながらも眠りに落ちる影を、夢のなかで小びとになるといふ夢へいざない、眠りと目覚めの波間で、ついに影は夢へと転生するのである。

転生の場合は無数の砂の世界。その片隅で痛みにたえかねた小びとが、さざ波の寄せる

砂浜に身を横たえている。小びとの耳葉には波の音が打ち寄せるが、その波動は時に規則的、時に不規則に律動を感じさせる。波音は波そのものにそなわったとらわれのない自由な流動性を秘めながら、小びとに波動と律動と流動を伝える。この三位一体がやがて世界の痛みをぬぐい去る方途を脳裏に生じさせる。無窮の音楽のように「めざめよ、めざめよ」と、リフレインされる声而降り、その声の落下とともに小びとは痛みを超えて覚醒へと出立する。痛みには真の覚醒への奥義が隠され、秘義的な痛みを神学を創成しはじめるだろう。

波の音楽によって砂浜から顔を持ち上げ、小びとは波に洗われた地点から、島の上の丘に向かう数百段の階段を登り始める。歩き出し、軽く走り、ついで陽光の羽を両の肩から生やし、やがて足をうかせて階段の頂きまで一気に飛翔する。数百段の階段の頂きには、右と左に円柱が立ち、右円柱の頭頂部に地球儀、左円柱の頭頂部に天球儀がみえる。二つの円柱は彼方への門を形成しているが、二つの円柱間の中央に立ったとき、小びとの身体は光りはじめ、光はいくつかの方向に照射される。足先から砂浜に向かう光。右手から地球儀を照らす光。左手から天球儀を射す光。両肩の羽からも光が発せられ、その光は回転しながら天球儀と地球儀をめぐる、惑星軌道のように光

る楕円となっていくが、楕円は中心を要請するようにみえる。

中心。渦をまく楕円の中心に位置する丸い小びとの頭。それは要請された瞬間に顔の形を変え、みるみる光の粒子で形成されたアムール虎の頭部になる。小びとの身体はそのとき、すでに地上性を失い、光粒子のアムール虎に変じているが、その吼え声とともに王冠が舞い降りる。天球儀と地球儀をしたがえたアムール虎の王冠。それは要請された中心軸の頂きを成し、門の向こうに連なるアーカーシャの霧の連山にわけいる羅針盤となる。霧のアーカーシャ。アムール虎の無限の故郷。アーカーシャを解き明かす無為の記号論が強い磁力を発している場所。その未来の故郷へ、光るアムール虎は旅立つだろう。

変身したアムール虎の光るまなこに、しばし名残の走馬灯が映え、砂浜を振り返る光るまなざしが地上の無数の砂に残る痛みを消しながら、エーテル体をスパークさせると、アムール虎のどが声を発する。「わたしを通過する無量の光が地上の砂の痛みを消す。これでいいのだ」。そうしてカウンターの主もまた光満ちたカフェで小びとのような赤児を抱き、アムール虎の仮面をかぶって聖めいて言う。「無垢はアーカーシャからの光を浴びている」。

◆プラスチック精神

中堂けいこ

白亜のオブジェを渡る風が重いのはすぐ坂を下りた岬から半島が臨めるからで人々は夏の終わりの浜辺で海水浴の名残を惜しみ小さな波打際を追い追われついでストロールが巻き上がる風を起こし白亜の粉末を帯びた発泡スチロールは樹木のふりをしながら会期がおわる日まで大いなる重量に耐えるのだった

☆

ずいぶん話だがオブジェの命運を決めるのは風の分量であると重さあるいは風力の法則サルマカン氏の研究によるのだが人々はこの小さな島嶼に吹く風の量的計測をいまだにサルマカン氏に委ねていることになんの疑問も持ち合わせずこの夏のタイフーンの個数を数えることのほうが重要事項であった

☆

まったくずいぶん話であるがサルマカン氏はタイフーンの数より個性のほうが重要であると唱えたのだったが人々はタイフーンの命名の仕方に問題があると気付きこれは大変危険な兆候であると島嶼の芸術推進班は以後海面を注視し続けついに竜巻の眼を捕らえることに成功した

☆

それで白亜のオブジェ製作者はいつしか世界的なアーティストと注目され会期を過ぎても島での常設展示という地位を確保し樹木のふりをしている発砲スチロールの塊はセメントで固められついでに石膏の粉末を噴射され前よりも猛々しく物々しい白い顔の人々に見せることとなったが誰かが白熊だと言った

☆

そうだ奴は白熊だ白熊に違いないと人々は言い合ったが作者は未だに風量を測ることにやぶさかではなかったので誰も竜巻を恐れず季節はずれのタイフーンにさえ命名の権利を人々に売却したりするのだったがそんな「私」の名のついた嵐が荒れ狂って白熊を破壊した日にはとても困るではないか

◆ 充滿する時間を歩み去るもの

高谷和幸

庭のふところは昼休みをしており（おりしも）風のためにひるがえっていた。昼食に出かけた駅員のコンパスは行き場を失ったところで、わたし以外のものは、線路（道のふくろ）を見渡しても、やんでしまった電車の破れを繕っているものはいない。庭のふところは、キミが六月に死んだ時間を実現できずに、こまかい鑢でていねいに磨滅させた本当の時間が（お行儀よく）二つの指の間で寒さにふるえている。「煙草に火をつけて下さい」。わたしの庭を、そう、こんな男にうつかりとうつしかえるなんて、それが（ニュアンス）の間違いだったよ。寒いからといって、どんな事情（ぬるい紅茶）があるにしろ愉悦の法律で殺人をするようなものだ。「アミーゴ、お前はどんな茶葉の葉緑素か」。明るい葬儀から持ち帰った微生物の会話が、単体のコピー・ペーストで沸騰するウソの時間でのどが痛い。「もつとのどを痛めるために、煙草に火をつけて下さい」。アミーゴ、お前はダン、ダンと胸板を鳴らすリズムをたたき出したではないか。わたしといえば、頭を二階の窓からダイブして、ダン、もう一つダン。このリズムでわたしの庭の背中に、古い図書館司書の女房と、古い制服のてかりが二次発酵した文字（ニュアンス）が切り刻まれる。……『市民になるのも悪くない結末だよ』……コンパスがわたしの事情を横目に、足早に電車の中に消えていった。今までのところ、わたしの庭のふところと、線路（道のふくろ）とが滞留しているが、わたしはどちらがどちらかが分からない。

◆ 姿態

オリオンもシリウスも
牡牛座も昴も
みづからが支配する星明かりに
浮かび出す
その姿態に
なほも魅せられた
寒流に乗って苦しく蒼白く
砂に打ち揚げられたものに

流木は屍のポーズ

神と勇者と猛獣が争い嫉妬する

寺岡良信

星屑の海から
女は投身した
流木よ
悩乱の果てに浄化を願った女の体
いまも官能を嗅がうとする愚味は
英雄たちだけではない

流沙が限りなく胸を吹き抜ける暁は
わたしもまた
密かな慾望を
嗚咽に隠しつづけてきた

だから
死に漂流する以外
贖ふすべをもたない
わたしのために
砂丘は独り波の縛に就かうとしてゐる

神戸詞あしび

76-2013.11 大橋愛由等



高松港の夜明け。瀬戸内美術祭は神戸から深夜船に乗っての旅立ちであった。

多島海でつむいだ 連詩のへことぶれ

なんとも言いがたい小旅行だった。トリエンナーレの「瀬戸内国際美術祭」に、詩人五人、川柳作家（柳人）一人の計六人で参加してきた。ものを書く人間ばかりだったので、旅の最中に緊迫度を増すために、創作活動をしながら島々をめぐろうと、詩的吟行をすることにした。俳人なら吟行となるのだが、詩人が中心なので、連詩形式にした。

手順は、一人に原稿用紙を一枚ずつくばり、それぞれが「発句」にあたる出だしの詩句を書き、それを他の五人に任意に渡していくというもの。そして最後は、その六つの連詩を見て私が、順番にならべて一つの作品にすることにした。

参加したのは、安西佐有理、大橋愛由等、情野千里、高谷和幸、中堂けいこ、にしもとめぐみの諸氏。誌面の都合

キリン
・白足袋の亭主セルフにトッピング 佐有理
・朝パンコーヒーで待つ亭主かな めぐみ
・振りそでに豊島行きの塩の味 和幸
・案山子いわくに醒めぬ夢なり 愛由等
・歩いてはグレーの猫の尻尾ふむ けいこ

★(6)

海と島を上空から見ていると、海が島に海が変わっていきうようだ。風は海水となつて道のあつちこつちでびちびちはねている。 和幸

それは鯨だとすれば鯨だと魚群の渦巻く様を黄色い瞳の人が傍ら泳いでマリノロキシ号は舳の揺れを激しく拒むのだ 飛魚のように けいこ

はしやくハチキンはじけるオテンバ 中途半端な秋の薔薇 ハラン含み 千里

魚が飛びはねるのはいいところを見たいから 帰りのバスに乗り遅れそう走っているのはバスの迷惑をかけるためか、やさしい心づかい、バスは走るバスは走る揺れる背もたれ めぐみ

バスの最後尾に乗っていたのが掃海母艦の艦長Nであり自船が世界を運ぶことができることをつねづね自慢していつかありとある虫たちをすべてあつめて最終航路にしようとしていたのだつたがセイレーンを含む海鳥たちをもその世界コレクションに入れようかと考えはじめたのだつた 愛由等

カモメは波間から飛び出した猫に追われ、アオサギはひつじ田で物見の客の視線に追われ、視線を奪ったトビは等高線図に追われ、オオガラスが近代を追い立て、犬が船を、船が七色うどんを、ごきげんようと吐き出して、ぐるりぐるり、春夏秋冬だった旅。 佐有理

上、すべて紹介はできないので、その一部を掲載することにしよう。
★(1) (このみ歌仙様式)
・フェリー待
つ詩人六騎
の夜うち朝
がけ 千里
・屋島ふみふ
みグランド

船中泊の○泊一日の突撃旅行で、島によっては連絡船が定員オーバーのために待機している時間も永かったが、連詩をしながらの旅はまんざらでもない快樂があった。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.87
めらんじゅ

2013年11月24日 通巻87号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等 (『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円 (税込)